

Glocal Tenri



2

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.18 No.2 February 2017

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
「竦んで居ては分からん」
／高見宇造…………… 1
 - ・ 天理教教理史断章 (113)
勢山文書④「おさしづ」の写し翻刻
／安井幹夫…………… 2
 - ・ 『教祖伝』探究 (32)
秀司様①
／深谷忠一…………… 3
 - ・ 「おふでさき」天理言語教学試論～「こと」
的世界観への未来像～ (34)
第4章 南方熊楠「萃点の思想」と「事
の学」⑨
／井上昭夫…………… 4
 - ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道
の様相 (2)
戦前のアメリカ伝道と日系移民社会①
／尾上貞行…………… 5
 - ・ 「おふでさき」の標石的用法 (18)
動詞について③
／深谷耕治…………… 6
 - ・ 伝道と翻訳 一受容と変容の“はざま”で一(3)
翻訳とは②
／成田道広…………… 7
 - ・ 新宗教のブラジル伝道 (最終回)
おわりに
／山田政信…………… 8
 - ・ 地域福祉を拓く 一新たな寄付文化の創造
一 (26)
ファンドレイジングのプロセス
／渡辺一城…………… 9
 - ・ 遺跡からのメッセージ (20)
イスラエルの遺跡調査⑥ シンポジウム
「イエス時代のガリラヤ地方と一神教の系
譜を探る」
／桑原久男…………… 10
 - ・ 天理参考館から (9)
2017年新春展「紙で遊ぶ世界一折紙とお
もちゃ絵」の紹介
／幡鎌真理…………… 11
 - ・ ヴァチカン便り (24)
臨時聖年の総括
／山口英雄…………… 12
 - ・ English Summary…………… 13
 - ・ おやさと研究所ニュース…………… 14
- 第7回「宗教と環境シンポジウム」に参加 (佐藤孝則)／第298回研究報告会 (越智秀一)／『グローカル天理』合本のご案内／『グローカル天理』年間購読のご案内／平成28年度「公開教学講座」／「教学と現代」のご案内：「家族をめぐる諸問題」第2回／第8回伝道フォーラム開催のお知らせ

巻頭言

すく 「竦んで居ては分からん」

おやさと研究所長 高見宇造 Uzo Takami

「陽気ぐらしの天理教か。良いなあ、若い人は。俺も頑張ろう……」。これは昨年暮れ、慌ただしい師走の夕刻にJR天理駅ホームで耳にしたある初老男性の呟きです。目をやると少し疲れた仕草の方でしたが、私は思わず会釈をしました。天理駅前では教祖130年祭活動を機に、青年布教師や天理教校生が路傍講演をつとめています。これはそれを耳にした方の一言でした。講演に何か感じることがあったのでしょうか。それとも若者の一途な姿に心が動いたのでしょうか。駅周辺では、いつも「売らんかな、買わらんかな」とエンドレスで広告テープが鳴り続け、人工的なその音声は時には喧しく感じることもさえます。そのなか、青年布教師の路傍講演は間違いなくこの方の心を捉えたのでした。

ところで、こうした路傍講演が天理教の布教活動の一つとして大々的に行われるようになったのは大正9年頃からと言われています。当時は路傍宣伝講演会と呼ばれていましたが、この年は教祖40年祭打ち出しの前年でもあり、天理教校長であった増野道興氏が『みちのとも』(大正9年10月号)の巻頭言に「街頭に立て」という檄文を寄せました。「街頭に立て、巷に出でよ、其の声を高うして、天理王命の名を唱えよ」というものです。これが多くの教信者の心を捉え、それが契機となり各地で路傍講演が盛んに行われるようになったのです。こうした取り組みは、現在も推奨され全教一斉においかけデーでは路傍講演が行われています。

この有名な檄文は、「本教の大勢は深き睡より醒め、大教宣伝の為に黒き門より絶叫の声を高うして満人環視の街頭に出でんとす。」で始まります。「黎明の沈黙を貫いて千満の金線が、大地の満衆に

生色あらしむるが如く、疲れ、迷い、悶え、泣き、苦しめる近代人の心理に、真実の靈光一度ひ照せば、病める者は癒え、迷える者は醒め、疲れたる者は力を得べし、……」と続きますが、私は男性の一言に、この一節が心に浮かびました。「成程、その通りだ」と何とも言えぬ嬉しい気持ちになりました。

当時、教内には、天理教はどこまでも個人布教だとして、こうした街頭での活動についてはその是非をめぐり様々な意見もあったようです。しかし信仰者が「己の信ずる信念を語らずには居れない」という一念から行う路傍講演は、誰の目にも好感が持てるのも事実です。誰にでもできることではないのかも知れませんが、公衆の面前で語るのにはやはり勇気のいることでもあります。以前、私はこうした路傍講演を続ける青年たちに、こんな「おさしづ」があることを話したことがあります。

それは明治32年6月6日に天理教の一派独立運動を始める旨を願われた際の「おさしづ」です。そこでは「何ぼ大きなものでも竦んで居ては分からん。世上へ出るで分かるというようなものや。やり掛けたら何処までもやらにゃならんが、一つの理」とあります。「竦む」とは「緊張のあまり、身体が自由に動かなくなる／小さくなる」という意です。未だ、一派独立が出来ていない天理教に対して神様は「竦んでいる」との厳しいご指摘でした。今、教えを説くことに迫害も干渉もないのかも知れませんが、肝心の私たちが竦んではいないでしょうか。大いに考えなければなりません。路傍講演をする青年の姿に心頼もしく思う反面、私たちがこの「おさしづ」をどう読み取るのか、どう世の中に出るのか考えねばと感じました。